

●二人で味わう古典和歌(63)

ながらへばまたこのごろやしのばれむ憂しと見し世ぞ今は恋しき

藤原清輔

『新古今和歌集』『雑』の一首。

「もし生き永らえたなら、苦しい今もまたなつかしく思
い出されるのだろうか、きつとそうだ。かつてあんなにつ
らいと思つた時代さえ、今となれば恋しいのだから」。

八百年ぐらい前の歌なのに、励まされる。歴史を振り返
り、また人生をかえりみると、本当にそうだなあと身に沁
みる。人の心の真実は昔も今も変わらず、人が生身なみみである
かぎり、名歌は時代を超えるのだ。

おそらく老境の作だろうと思つたら、ちがつた。家集
〔清輔集〕には「いにしへ思ひ出でられけるころ、三条
大納言よみいまだ中将にておはしける時つかはしける」と詞書
がある。三条大納言とは、清輔より一歳年長の藤原公教きよのり。

その中将のころといえは、清輔ともども三十歳前後と推測
される。そうなると、やけに老成した人だなあ。



藤原清輔は長治元(一一〇四)年生まれ。父・顕輔あきすけとの

不和が原因かどうか、四十代後半まで官位は低迷し、歌の
ほうも久しくぱつとしなかった。が、崇徳院に知られ、し
だいに歌壇の重責を担う立場となり、やがて俊成をリーダ
ーとする革新派・御子左家みこひだりけと拮抗する、守旧派・六条藤家
のリーダーとなる。『袋草子』など、博学の歌学者として
も知られる。それまでの不遇により歌学の才が蓄えられた
のだろうと記す和歌辞典もあり、心に留まる。

清輔の経歴のなかで、とくに興味深いのが「白河尚歯会しろかわしやうしかい
和歌」。唐代に白居易が考案した敬老詩会「尚歯会」(「尚」
は敬う、「歯」は年齢)の和歌バージョンを初めて催した
のが清輔である。承安二(一一七二)年、白河の宝莊殿院
にて。漢詩の「尚歯会」にならつて人数は七人。八十代一
名、七十代三名、六十代三名だったという。そうか、現代
は「尚歯会和歌」の活況期と思えばいいのか。

冒頭の一首は、『小倉百人一首』『近代秀歌』にも選ばれ
ている。御子左家の定家の心をも捉えた、普遍的な名歌と
言えるだろう。
(小島ゆかり)